

歴代誌第二14章11節 「助けられる主」

1A 偶像の始末

2A 神の能力

3A 祈り叫び

1B 直接的願い

2B 主の安息

4A 御名による対峙

1B 神の側

2B 神の所有

本文

私たちの学びは、歴代誌 13 章まで先週来ました。そして今日は 14 章から 17 章まで行きたいと思います。今朝は、14 章 11 節に焦点を当てたいと思います。

アサはその神、主に叫び求めて言った。「主よ。力の強い者を助けるのも、力のない者を助けるのも、あなたにあっては変わりはありません。私たちの神、主よ。私たちを助けてください。私たちはあなたに拠り頼み、御名によってこの大軍に当たります。主よ。あなたは私たちの神です。人間にすぎない者に、あなたに並ぶようなことはできないようにしてください。」

1A 偶像の始末

ユダの国はソロモンが偶像礼拝を導入してしまっ以来、弱くなっていきました。彼の息子レハブアムが王となって、国が北イスラエルと南ユダに分裂しました。ユダは、その後エジプトからの攻撃を受けました。そして、北イスラエルからも攻撃を受けました。

けれども、アサが王となって霊的な立ち上がりを見せます。私たちが今日学ぶのは、霊的復興、リバイバルです。私たちが、ソロモンのように罪を犯してしまつたら、その後には必ず結果を刈り取ります。罪によって自分の霊が救いの喜びを失います。そして、クリスチャンとして敗北してしまつたと感じ、元気がなくなり、これからは二流、三流クリスチャンとして生きなければいけないのか？と落ち込んでしまいます。けれども、主はいつも、私たちが立ち上がることができるようにしてくださっています。「あなたは私を多くの苦しみと悩みとに、会わせなさいましたが、私を再び生き返らせ、地の深みから、再び私を引き上げてくださいます。(詩篇 71:20)」私たちを生き返らせてくださるのです。

私たちは前回学びました、レハブアムがイスラエルの民に重税を課すことを決めた時に、北イスラエルの人々の心が彼から離れ、自分たち十部族でヤロブアムを王として国を始めてしまいまし

た。けれども、彼のその判断が悪かったのもさることながら、ソロモンが犯した罪によって、主が国を二つに引き裂くと約束されたのが実現したからだ、とありました(10:15)。私たちの生活の中で、いろいろな騒ぎがある時に、不安や混乱がある時に、その表面的ところに問題の所在があるのでなく、自分と神との間に隔たりを作っているから起こっています。主が、自分の心にある何かをそうした出来事を通して炙り出してくださいます。

ですから、私たちは主に立ち返る必要があります。アサは、ユダの地にあった偶像を取り除きました。「異教の祭壇と高き所を取り除き、柱を碎き、アシェラ像を打ちこわした。(14:3)」私たちは、家に生ごみを残したら全体が臭くなってしまいうように、自分の内から霊的なゴミを捨てなければいけません。「その教えとは、あなたがたの以前の生活について言うならば、人を欺く情欲によって滅びて行く古い人を脱ぎ捨てるべきこと、(エペソ 4:22)」情欲とは、性的な欲望に限りません。目の欲、肉の欲、自慢など、この世にあるものを愛するのであれば、それはすべて情欲です。自分の内からこれらのものを取り除きます。

そしてアサは、ユダの町々からこれらの偶像を取り除いたことによって、主がソロモンに約束しておられた安息を手に入れました。ソロモンが平和と繁栄を享受したように、アサも戦わなくてもよくなっていました。

けれども、主にあって生き返ると、霊的に生かされると、新たな、性質の異なる戦いが始まります。私たちが自分の罪を悔い改め、主からの豊かな罪の赦しを得ます。そして、自分の生活にあった偶像を取り除きます。肉の行いも御霊によって殺すことができます。このように主の憐れみと恵みの中に生きる時に、それを嫌がる霊的存在がいます。そうです、悪魔です。

アサは、ユダを主にあって守っていただいている中で、南からとてつもない戦力の敵がやってきました。エチオピアのゼラフが、アサの軍勢よりも二倍、かつ戦車も加えてユダの領土に侵入してきたのです。私たちが信仰的に生かされると、それで生活がバラ色になるわけではありません。むしろ、何か悪いことが起こったりします。自分がこれまで考えたことのない汚れた思いが頭をよぎったり、これまで平穏であった人々が急に自分に攻撃的になったり、とてつもない不安が自分を襲ってきたりと、主に立ち返ったのに反対する勢力が出てくるのです。その時の戦いは、罪との戦い、肉との戦いでもありますが、本質的には自分の信仰を取り壊そうとする霊の戦いの中に入っています。

そこで私たちは、アサの祈り叫びに倣うことができます。

2A 神の能力

アサは言いました。「主よ。力の強い者を助けるのも、力のない者を助けるのも、あなたにあっては変わりはありません。」今、彼が対面しているのは、自軍の二倍ある軍勢と三百台の戦車です。

もちろん当時は馬が戦車を運んでいましたが、近現代の戦争で戦車がやってきた時のあの恐ろしさと変わりません。その時に彼が、祈ったのはこれだったのです。

しばしば言われる言葉があります。創世記1章1節、「初めに、神は天地を創造した。」この言葉を信じることができれば、いかなる奇跡も信じることができる、と。天地を創造する方は全能であり、軍勢が百万であろうが、一万であろうが変わりがない、ということです。私たちは、神の知識を学びます。「私たちの主であり救い主であるイエス・キリストの恵みと知識において成長しなさい。(2ペテロ 3:18)」私たちが神とキリストを知ることによって、それを自分の生活で実際に起こっていることに当てはめていく必要があります。そのことによって、初めてその知識が知識として、つまり神について知っているではなく、神を知るようになります。その人格的な関わりの知識は、祈りによってもたらされるのです。

イエス様が高い山から下りてこられた時に、悪霊につかれていた男の子がいました。父がいて、彼がこのようにイエス様に話したのです。「もし、おできになるものなら、私たちがあわれんで、お助けください。(マルコ 9:22)」この言葉に対してイエス様が、「できるものなら、と言うのか。信じる者には、どんなことでもできるのです。(23節)」これは、この父親がイエス様が、神から来られた方であることを知っていることをご存知であったから発せられた言葉です。この方が悪霊を数多く追い出されて、この方が実にダビデの子であることを知っているから言われました。自分で念じて信じるようすれば追い出せる、ということではなくて、イエス様が天と地のいっさいの権威を持っておられることを知っていながら、「できますならば」と言ったことに対する不信仰をイエス様は責められました。頭の知識で知っていることが、必ずしも実際の知識になっていないのです。

ですから、今アサは、自分の知っている全能の神に叫んだのです。興味深いことに、私たちはいつの間にか、「このことは神にはできる」「いや、このことは神にはできない」という区分けを行っています。神にとって、癌を治すことと、風邪を治すことは同じように何でもないことです。ところが、私たちは自分の考えている範囲で祈っています。つまり風邪であれば、何とか直るという憶測で、「主よ、治してください。」と祈れます。けれども癌であると聞けば、同じように「主よ、治してください。」という祈りは捧げにくいものです。やはり、悪霊のつかれた子の父親のように、「できますならば、治してください。」と祈ってしまうのです。自分の限界を神にまで押し付けてしまう、その傾向があります。

この祈りをしてしまって、主から叱責を受けた人々が、その父親の他にもいろいろいますね。サラは八十九歳になっていて、「サラに男の子が与えられる」と聞いた時に、心の中で笑っていました。そして主が言われました。「主に不可能なことがあるか。(創世記 18:14)」そして、金持ちの青年がイエス様から立ち去った後に、イエス様が「らくだが針の穴を通るより、金持ちが神の国に入ることのほうが難しい。」と言われた時に、弟子たちは驚いて、「それでは、だれが救われることができるのだろうか。(マルコ 10:26)」と言いましたが、イエス様は、「それは人にはできないことですが、

神は、そうではありません。どんなことでも、神にはできるのです。(27 節)」と答えられました。

私たちは、自分の愛する人々の霊の救いについて、どう祈られていますか？その頑なさを見て、「この人は無理だ」と決めつけてしまっていないでしょうか？「いえ、救われるのが御心でないのかもしれないのでは？」と思っていますか？間違いです！これも、自分の限界を神に持って行ってしまっているのです。「『キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世に来られた。』ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。(1テモテ 1:15)」その人を救おうと神は願っておられるのです。その御心を果たすべく、私たちが神に祈ることを神は求めておられます。

3A 祈り叫び

1B 直接的願い

そして、アサは「私たちを助けてください。」と祈っています。とても短い祈りですね。けれども、正直で単純な祈りです。似たような祈りをした人で誰がいますか？そうです、使徒ペテロです。イエス様がガリラヤ湖の水の上を歩きました。そして、ペテロは、「主よ。もし、あなたでしたら、私に、水の上を歩いてここまで来い、とお命じになってください。(マタイ 14:28)」と願いました。イエス様は、「来なさい。」と言われました。するとペテロは舟から出て、水の上を歩いてイエス様のほうに行きました。「ところが、風を見て、こわくなり、沈みかけたので叫び出し、「主よ。助けてください。」と言った。(30 節)」とあります。一生懸命、どのように祈るか考えていたら沈みますね。「恵み深きご在天の父なる神様・・・」と祈っていたら沈んでしまいます。

私たちが慌てるのは、仕方がないことです。けれども、その慌てることを主にそのまま叫び求める祈りによって申し上げればよいのです。これを、はしたないと思っははいけません。「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです。(ヤコブ 4:2)」とあるとおりです。願うという単純な命令に従いましょう。

2B 主の安息

そして、「私たちはあなたに拠り頼み」と言っています。英語ですと、「私たちは、あなたのところで休みます(We rest on You)」と訳されています。すばらしいですね、主が戦われることを信じます。自分ではないとして、主のところに留まる、主のところで休みます。いかがでしょうか？もちろん、私たちは自分たちの責任を果たさなければいけません。アサ王も、ここで祈った後に自分の軍隊がエチオピアの軍隊に対峙するのをやめさせたとは思えません。最善の戦闘態勢で臨んでいたはずですが、けれども、最善を尽くしながら、この戦いは主のものである、というところに立っていたのです。主に拠り頼んでいました。

例えば、誰かがいなくなったとします。実際、イスラエル旅行である姉妹がはぐれてしまいました。私は携帯の拡声器を持っていましたから、それを使いながら大声でその姉妹の名前を呼びました。かなり遠くまで捜しに行きました。けれども、「彼女は主のものだ。」という祈りがありました。捜して

いるのですが、主が見つけてくださると信じていました。そうすると、ガイドの方の携帯に電話がありました。彼女が通りすがりのイスラエル人をお願いしたそうなのです。たまたま、私が前日のミーティングでガイドの携帯番号を教えていました。そして彼女もたまたま、書き留めていたとのことでした。彼女は主のものです。

このことは、いろいろなことに当てはめられますね。自分の息子、娘に何か起こったらどうしよう？彼らは主のものです。自分の教会で何か起こったらどうしよう、主の教会です。私はこのような神の語りかけを受けているが、それを行なったら生活基盤がなくなってしまうかもしれない、いいや主の備えです。主のところに留まり、休むのです。

4A 御名による対峙

1B 神の側

そしてアサは、「御名によってこの大軍に当たります。」と祈りました。これは言い変えますと、「あなたの側について、この大軍に当たります」と言っています。「私がこの大軍に当たります」ではなく、「あなたのほうに付いて、この大軍に当たります。」と言っています。神が自分の側について戦うのではなく、自分が神の側について戦うのです。神が自分に合わせるのではなく、自分が神に合わせるのです。自分の意志を神がかなえるのではなく、神の意志を自分が行うのです。けれども私たちは、しばしば自分の側に主が付いてください、と祈ります。主が行おうと願っておられることは、自分にはできないと決め込みます。主が命じておられることがあるのに、それには従っていません。そして自分にできることを、自分の方法でその枠組みを作ります。そして、「主よ、この私の小さなプロジェクトを祝福してください。」と祈ってしまうのです。そこでは、「御心が天になるごとく、地にもなさせたまえ。」という祈りではなく、「私の願いと心をなさせたまえ。」と祈っています。

士師記に、ミカという人がでてきます。彼は母のお金を盗みました。そのことを母に告白しました。すると母は、「主が息子を祝福されますように。」と言いました。そしてその銀で、像を造りましようと言いました。もうめちゃくちゃです。そして自分の家に、神の宮を持っていたのです。祭司も自分の息子にやらせて、彼のためにエポデを作り、そして偶像ティラフムも作っていました。士師記の著者は、「そのころ、…めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。(17:6)」と言っています。そこにベツレヘムからレビ人が来ました。そして、ミカは彼に、「私といっしょに住んで、祭司となってください。毎年、お金と生活費を与えます。」と言いました。レビ人も喜び、それでこう言ったのです。「私は主が私をしあわせにしてくださいをいま知った。(17:13)」主が幸せにするのではなく、「お金がほしい、安定した仕事に付ける！」と思って幸せになっているだけです。主が祝福しているのではなく、自分で自分の心を祝福しているだけです。

イエス様は、「またわたしは、あなたがたがわたしの名によって求めることは何でも、それをしましよ。父が子によって栄光をお受けになるためです。(ヨハネ 14:13)」と言われました。それでは、「イエス様のお名前によって祈ります」と言ったことは全てかなえられるのだ、と考えます。いいえ、

そうではありません。そのすぐ後に、「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。(15 節)」と言われました。イエス様を愛しているから、イエス様の命令の中に自分を留まらせます。イエス様の命令を行ないたいから、その御心を行うために、イエス様の名前で願います。だからかなえられるのです。自分のしたいことを祝福されるために、かなえられるわけではありません。

イエス様のすばらしい約束、「わたしの名によって願うなら、それは何でもしましょう。」という約束は、弟子たちに対する約束です。「それから、イエスは弟子たちに言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい。(マタイ 16:24)」自分のことを忘れて、ただイエス様だけになり、ただ神の国のことを思って動いている者に、神がご自分を現して惜しみなく与えてくださる広い約束です。

2B 神の所有

そしてアサは、「人間にすぎない者に、あなたに並ぶようなことはできないようにしてください。」祈りました。その通りです、主が行われたことで問題が起こっているのであれば、自分が罪や重荷を捨て去って主に付いてきたことによって起こった問題であれば、「それはあなたの問題です」ということです。主が起こしてくださった問題ですから、主が戦ってくださいます。主がその障壁を崩してくださいます。

私が信仰生活に困難を感じて、ある友人の相談したことがあります。その友人はこう言ってくれました。「お前は、正しいことをしているはずだ。」そうです、もしすべてがうまく行っていたとしたら、それは正しくないことをしている可能性のほうが大です。アサが偶像をユダの地から取り除いたからこそエチオピヤが攻めてきたと同じように、正しいことを行なっているからこそ起こる問題があるのです。迫害を受けていたクリスチャンに、ペテロがこのように励ましました。「罪を犯したために打ちたたかれて、それを耐え忍んだからといって、何の誉れになるでしょう。けれども、善を行なっていて苦しみを受け、それを耐え忍ぶとしたら、それは、神に喜ばれることです。(1ペテロ 2:20)」

主は必ず勝たせてくださいます。自分が主の側に付いている限り、自分ではなく主が戦ってくださいます。その信仰の勝利の一步一步を踏みしめて、神をほめたたえましょう。神が自分と共におられることを体験しましょう。